



## 「地域担当社協ワーカーのつどい」(広域版)

映像を見ながら分かるまで話してみよう

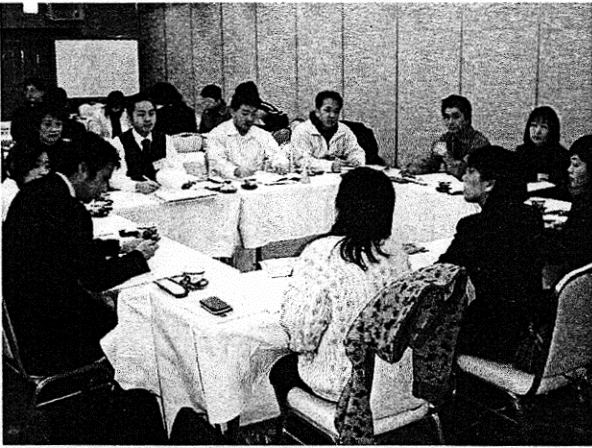
## ■■■ 実施報告 ■■■

私たち地職連の取り組みとしては、今年度一番大きな事業となった今回のつどいですが、数年前までおこなわれていた「社協職員をつどい」とは大きく違う、また他の研修とも大きく違うものになりました。どのように違っていったのかというと、まず、企画や運営に携わるべき「実行委員会」を設けることができなかった点です。

総会での事業・予算承認からこのつどい実施まで、時間がなかったというのは言うまでもないのですが、事務局体制もままならなかった訳ですから、当然のごとく、役員会を招集して、企画立案および運営を実施できる状態ではありませんでした。そういった意味では、会員や役員の意向を尊重しながらおこなう「みんなのつどい」になったとは言い難いものでしたが、その分、参加者ができるだけ会話できるようにと、企画内容を今までとかなり変えたつどいでした。大規模な講義形式の研修をやめて、小人数グループに分け、小さな講義部屋を四つ固定して、二日間で全室を回るというローテーション研修を取り入れ、参加した皆さんからはかなりの高評価をいただいたよう

です。(アンケート結果より)

また、参加の状態も当初二〇名定員の大規模企画の予定が、蓋を開ければ参加者六〇名と予定の半分になってしまいました。これは企画に魅力がなかったのか、定期的な無理があった(はねつどの研修と日程重複)のか、もともと定員が多すぎたのか、もしくは地職連事業に對しての不信感がまだあるのか定かではありませんが、しかし、逆に少人数だったことで、参加者同士が会話する機会が多かったようで、ケガの功名といったところでしようか、今後の研修も無理せずに五、六〇名を定員としてやった方がいいとの結論に達しています。



また、事例報告者との事前打合せも行わず、「ワーカーとしての自分が何をすべきで、何をしてきたのか」を伝えて欲しいとお願いただいただけで当日に臨んだのですが、各部屋ではこちら側が意図する以上のメッセージを伝えて頂けたようです。報告者の皆さまありがとうございました。

さらには、事例を聞くだけではなかなか整理がつかないだろうということで、考えたあげく、開催要項に載せていませんでしたが、急ぎよ熊本学園大学の小野達也先生に無理なお願いをし、完全にお任せしたミニパネルとグループ討議、レクチャーにてまとめて頂きました。(先生には各部屋での報告も全て聞いて頂き、事後に反省点などアドバイスもいただきました。ありがとうございます。)

今回の企画は、完全に準備不足だったにもかかわらず、何とか実施にこぎ着け、皆さんの気持ちも少しも熱くなったようですので、ホッと胸をなで下ろしていますが、これも、地職連からの無理なお願いに対して、皆さんが親身になってご協力いただいた賜だと、深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

以下に、各部屋での報告内容と、参加者の感想を掲載しますので、参加できなかった方は、是非お読み頂き、参加した方々がどんな事を感じて帰ったのかイ

メージし、ご自分の仕事にも結びつけて考えてみてください。



## ●●● 各部屋の事例報告内容 ●●●

「ふれあいネットワーク組織を考へみる部屋」  
事例提供・説明者 水俣市社協 田代久子氏

「水俣方式」と言われるふれあいネットワークの推進方法について、「縦系に力を 横系にまごころを」というテーマで、お話し頂きました。そこには、さまざまな工夫や仕掛けがありました。

第一回目には該当地域内の主だった人の共通認識づくりをされ、「懇談会」の日程決定やそのチラシ配布依頼を行います。第二回目の懇談会は該当地域内の全



住民が対象です。ここでは、社協活動やふれあいネットワークの説明や啓発ビデオ(独自に制作)の上映、少人数に分かれてのワークシヨップ、そして十日以内の発足会開催の日程決定等を行います。第三回目はふれあい活動員希望者を対象に発足会を開き、訪問対象者の選定や活動連絡会の日程等を決めます。安否確認を兼ねた訪問では、初回に緊急連絡カードを配布し、訪問了解を得ます。ふれあい活動員は2〜4人で構成する5つぐらいのチームに分け、担当家庭を限定せずに各週ごとに交代でローテーションを組んで訪問活動を行います。又、活動連絡会では情報交換やケース検討をしながら連携を図ります。特徴としては、推薦型や委嘱型ではないので誰でも参加できる事や、人によって「気づき」が違うため潜在ニーズの発掘につながる事、ローテーションを組むため各ふれあい活動員の負担が軽く継続しやすい事、対象者が自分の相手を選ぶ事ができる等があげられます。地域主催の「ふれあいいきいきサロン」や「福祉施設見学」「出前福祉講座」「調理実習」、市健康管理課主催の「健康教室」「栄養教室」「認知症学習会」等も活動メニューに入れられています。第一回目以外の司会や受付は地域の方にお任せし、活動連絡会も社協は第一回目のみ参加し、サロンには出ずに使い捨てカメラを渡して撮ってもらおうので

す。地域独自で取り組めるメニューや行政の専門職にお願いできることはお任せし、社協は「住民全体を対象にした福祉研修会」や「リーダー交流会」「アンケートによる実態調査」等を担い、ワーカー自身が率先して行動して身動きが取れなくならないように心がける事が大切だと話されました。

活動を推進するうえの留意点を、田代さんは十六あげられました。そのいくつかをご紹介します。

- ① 組織のための活動ではなく、活動のための組織
  - ② 地域の中に出向き、地域の中で考える
  - ③ 一人の百歩より百人の一步を目指す
  - ④ お願いするより問いかける姿勢
  - ⑤ 「記録」や「まとめ」を怠らない。
  - ⑥ 「想像力」とそれを具現化する「創造力」が必要
  - ⑦ まちづくりの良きプロデューサーになること
  - ⑧ タフであること
  - ⑨ とにかく「やりながら考える」こと
  - ⑩ 嫌いな人をつくらない
- 現在は三本目の啓発ビデオ「地域リビング」の制作や児童虐待に取り組まれておられるそうです。田代さんの情熱とパワーに、元氣とたくさんのヒントを頂きました。

報告者 山本ベティ和恵(桂川町社協)



「ふれあいいきいきサロンを考えてみる部屋」  
事例提供・説明者 飯塚市社協 藤川征典氏

今では、サロン活動Ⅱ飯塚市と言われる程、先進地になっていますが、その仕掛け人である藤川さんの今回の話は、ワーカーにとって大切なことは何かということ、自分の体験談から語られ、この部屋は「熱かった」と皆さん感じたのではないのでしょうか。

藤川さんは、「ワーカーは地域に出でなれば、仕掛けが大事」と語られます。飯塚市では以前から福祉員制度やネットワーク委員会等の地域組織があったことと、藤川さん自身が共同募金担当の頃か

ら、町内会長さんたちとは顔見知りだったこともあり、地域には入りやすかったようですが、更に顔を売り、多くの方と地道に信頼関係を築いていった結果、思いが通じ、サロンを始めとするいろんな社協事業への理解協力をしてくれるようになったそうです。また個人的にも、市や団体等の行事に積極的に参加していき、特に山笠に参加することで、住民との一体感をより強くし、認めてもらえたという実感を感じました。

「藤川さんが言うならやってみよう」と動いてくれるのは、このような住民との信頼関係があつてこそだと思います。しかしその過程では、失敗も数多くあり、人間関係のドロドロさの中に入ることもあり、出る杭が打たれることもあり、そう簡単ではなかつたそうですが、何が良かったのかを振り返った時、それは段取りの悪さだったとのことでした。

ワーカー自身が思いや夢、理想等、熱意を持って地域に入って行かない限り、伝わらないし動かない。それができなければ、社協ワーカー失格だと言われたことを皆さんはどう感じ取ったのでしょうか?

飯塚市における「ふれあい・いきいきサロン」(住みなれた地域で支えあうまちづくり)のビデオは、出演者の笑顔と笑い声が印象的で、参加者やボランティアの誰もが楽しさを共有していることが

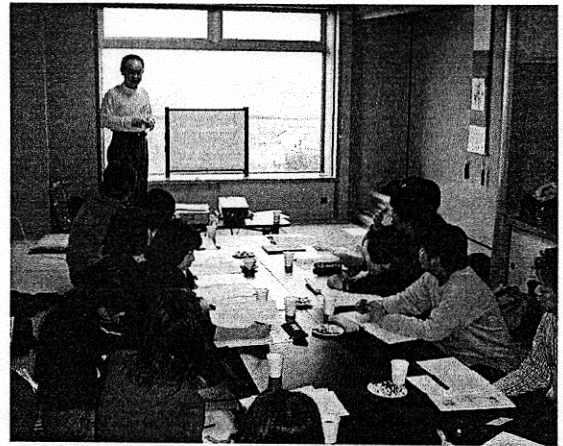
伝わってきました。

サロン活動は、何ヶ所や何回等、一見数で評価されがちですが、介護保険認定漏れ者や予防の問題を中心に、昔の長屋や井戸端会議のようなつながりづくりを、住民が必要と思っで行っているかという点を訴えながら組織づくりを進められています。

サロン活動は、住民主体活動の一つの方法に過ぎません。福祉問題の発見、解決にいかにつなげるかも、ワーカーの働きかけにかかっています。

地域高齢化率やニーズ調査、サロンアンケート等の調査。サロン日を狙った空き巣対応として、当日に参加者宅を男性協力が戻る見回り隊の結成。サロン開催地域内の理髪店が、サロン前日になると参加者で満杯状況。看護師や特技ボランティアの登録利用。行政の出前講座をサロン開催型へ変更等、少しの事例ではありましたが、飯塚市ではサロン活動を住民たちが必要と感じ、自分たちで評価、見直しを行いながら住民主体の地域づくりへと広がって行っていました。そしてそこには、藤川さんの熱意と、社協ワーカーとして、また時には一個人としての地域との地道な関係づくりや仕掛け方が大きかったことを感じさせられた部屋となりました。

報告者 花岡早織 (桂川町社協)



「福祉移送サービスを考えてみる部屋」

事例提供・説明者 直方市社協 山下健一郎氏

春日市社協 園木崇嗣氏

浮羽町社協 物部美加氏

この部屋では高齢者や障害者などの外出困難な方を支援する「移送サービス事業」を題材とし、支え合う地域づくりのあり方や当事者の人間としての生き方を尊重できる社会づくりというものを、考えてもらうきっかけとなればと開設しました。

春日市・直方市・浮羽町3市町で事例発表を行い、浮羽町社協の事例ではビデオ上映と担当の物部さんから発表をしていただきました。

山間部が多い同町では、高齢化と交通アクセスの少なさは「日常生活のなかでの移動という問題」を浮き彫りにしているそうです。また、「山間地区の移動手段に関する意識調査」を行った上で、課題を明らかにし、以前から行っている移送サービスを含め山間部の高齢者が移動しやすい最善の方法を探り、町にも調査の結果を報告したそうです。

物部さんは、「生活に欠かせない「衣食・住」の衣は移動の移ともいえるのではないか」と言われました。

春日市社協の事例発表では園木さんからお話を頂きました。

春日市は人口密度が高く、JR・西鉄・路線バス、更にコミュニティバスと交通アクセスはあるものの、移動のニーズはそれだけでは解決できない問題だといえます。

園木さんは、「私たちが時間と場所を問わず移動できるように、障害を持つ持たないに関係なく移動できる、それが本当のニーズではないか」と言われました。

お二人の発表と別に、小人数によるグループ討議の時間も設け移送サービスの行っている社協、行っていない社協とそれぞれではありますが、各社協同士の情報交換なども行いました。

長崎市社協の吉川さんから、「長崎では、坂や階段が多く、自宅から、車に乗

り入れる場所までの移動が困難」と地域特有の問題を言われ、参加者一同うなる場面もありました。

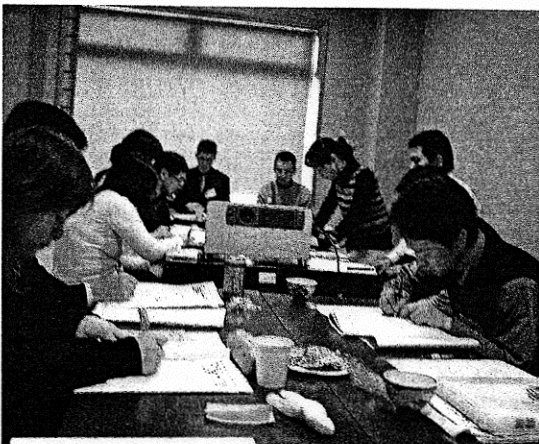
さて、最後に直方市社協の山下さんのコメントで説明を終わります。

「来年より、利用者からお金を徴収する移送サービスについては市町村の設ける「運営協議会」に申請書を提出し、認可を受けられない限り、取締りの対象となるこの移送サービス事業。

その申請には担当者にとつてさまざまなハードルが存在します。

これから「より当事者側に立った事業を」と考える移送担当者にとつて、このような地域連絡会形式のお互いの連携の場が必要になるのは間違いない。』

報告者 能塚治一郎 (小郡市社協)





「福祉問題調査活動(福祉マップづくり)を  
考えてみる部屋」

事例提供・説明者 浮羽町社協 國武竜一 氏

この部屋は、「福祉問題調査活動(福祉マップづくり)を考えてみる」というテーマで、浮羽町社会福祉協議会の國武竜一氏より事例提供及び説明をいただきました。

この福祉マップにたどり着いたのは、まだ國武氏が社協に入つてすぐの頃、自分の仕事(地域担当職員という職種)は何なのか考えたことから始まった。分からないままでは悔しいとのことで國武氏、ちよつと勉強してみたら「社協は住民主体の地域福祉活動の推進役」という大切な役目を担っているらしいと分かるが、じゃあ「住民」って何?色んな疑問がまた出てきた。地域(サロン・福祉座談会・福祉大会)に出てみたが、なかなかニーズを拾い上げるところまで至らない。地域住民といつても地域の世話人さんなど一部の方としか接することが出来ない。どうやったら、もつと地域に入り込めるのか?どうやったらみんなの関心事として、みんなが関わることが出来るのか。國武氏は悩んだそうです。

き問題点を落としとしていった。まずは、世帯構成から見えていくと、たつた8軒の中でも、高齢者独居世帯、母子世帯、身体障害者世帯などなど、様々な状況の世帯があるのに気付く。次に、住環境についても、危険箇所がたくさんある事に気付く。さらに、ゴミの散乱状況や景観美化、防火用水、防犯灯、子どもの遊び場など書き入れていったら、何だか賑やかな地図になってしまった。これが福祉マップのきっかけになったようです。

これは、結構おもしろいし、熱中するし、何より課題が一目で分かる。これは福祉活動の取り組みに使えろと思つた國武氏。「ふれあいのまちづくり事業」の一環として設置していたモデル福祉会に、自分の作つた地図を持って行って、一緒に考えてもらつたところ、区民が総出で関わることができ、いろんな人たちからも意見を吸い上げるのにいいのではないかということ、みんなで知恵を出し合いながら、数回にわたり話し合いを持ち実現にこぎつけた。

ただ、この「福祉問題調査活動(福祉マップづくり)」は、小地域福祉活動の自発的展開をねらつた、単なる「きつかけ」づくりであつて、住民自身で問題を発見し、考え、改善し、社協や行政につなげる。そのような自分たちの地域を良くするための、「ちから」をつける活動であるとのことでした。

この取り組みは、「地域組織化」の一つであるが、みんなが感じることのできる、平均的な課題は取りかかれるにしても、実際に課題当事者が抱えている重たい課題は、マップではでてこないし、当事者組織の力で解決していこうという動きにも限界がある。だから、自分(地域担当職員)のやっている仕事、社協が取り組んでいること、地域が実践していることをうまく融合させ、最も相乗効果が出るように、自分たち(ワーカー)が、それぞれの関連を見つめ直す必要がある。そして、新たな発想と取り組みを取り入れていくことが必要である、と國武氏は熱く語られてありました。

報告者 池松昌亀(大刀洗町社協)



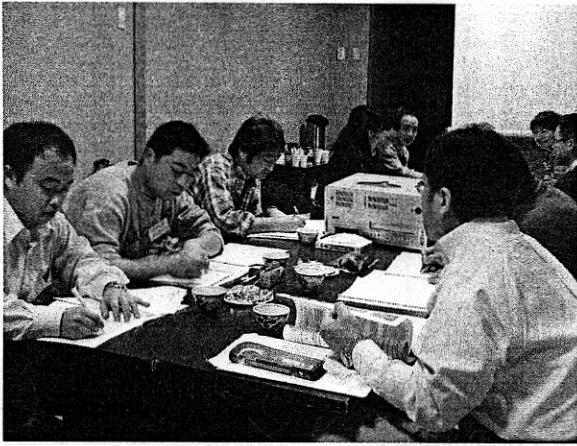
参加者の感想は…  
「社協ワーカーのつどいに参加して」

須恵町社協 平田 重彦

社協職員の皆さんこんにちは。須恵町社協の平田と申します。この度、はじめて福岡県地域福祉活動職員連絡会主催の研修に参加させていただきました。

4つのテーマのなかでも特に印象に残つたのは「福祉問題調査活動(福祉マップづくり)を考えてみる部屋」の講義でした。福祉マップづくりをひとつのきっかけに、老若男女の住民を巻き込みながら、「地域について楽しみながら考える」を、具現化した事例として紹介していただきました。特に参考になったのは、担当する事業の目的・根拠・実践・評価を整理している点でした。さらにそれを文章にあらわしていたので、受講した側にとっては、とても興味深い内容でした。私は社協職員として6年目となり、一通りの事業は把握したつもりですが、中には「困っている人がおるけん、当然必要だろう」などの漠然とした気持ちで取り組んでいる事業も、少なからずあつたように思います。そこに問題意識をもつきつかけになったのが何よりの収穫でした。

坂本龍馬は私利私欲を捨て、日本の行く末を案じ、国事に奔走(ボランティ



ア?) したそうです。社協職員は仕事なので、私利私欲を捨てるのは当然なのですが、自分自身何をすべきかを念頭に、「町事」に奔走すべきだということを、篠栗の田中君・筑穂の田川さんと熱く語り合い、互いを奮い立たせています。(読んでますか?) 残念ながら2人は今回の研修は不参加だったので、近々に集まって「つどい」について報告したいと思います。

少人数グループによるローテーション方式で、4つのテーマを聴講するスタイルは、アットホームななかで学ぶことができ、受講のしやすさも感じました。ぜひ、次回も参加させてください。ありがとうございました。

「地域担当社協ワーカーのつどい」

に参加して

佐賀県鳥栖市社協 磯野富美子

県外組には来ないだろうと、安心してきっていた私の元に、原稿用紙が届いた時にはあせりましたが、千円という良心的な参加費用で、私達県外社協にも声をかけていただき、あのように充実した研修を受けさせていただきましたので、お礼の気持ちを込めて感謝を書かせていただきます。

今回参加して、本当に良かったです。とても収穫の多い2日間でした。一番の収穫は、たくさんの方々と交流が持てた事です。ほとんどの方が初対面でしたが、事例提供者の方々や4つの部屋を一緒に回った第2グループの方々、2日目のグループミーティングの方々。いろいろな地域の実状や考え方を聞かせていただき、大変参考になりました。同じ地域担当者とはいえ、それぞれに状況が違い、同様のテーマをいかに自分の地域に生かしていけるかが大きな課題であり難しいところです。私の復命書が8枚に達した点から、学ぶ事がいかに多かったかをご想像いただけると思います。

①水俣市社協の田代さんは、ローテーションを組んだ水俣方式のネットワーク活動を、立ち上げから分かり易く説明し

て下さいました。

②飯塚市社協の藤川係長からは、「地域に出て行け!」と檄を飛ばされ喝を入れられました。

「はい!がんばって出て行きます。徐々に!」

③福祉移送サービスについては、鳥栖では取り組んでいませんが、移送ボランティアと利用者の心の交流が素晴らしいと思いました。

④福祉マップとは、バリアフリー地図の事かと誤解していましたが、國武さんが地域に入って、福祉のゼンリン地図のようなマップを、住民自らの手で作り上げる過程を、分かり易く説明していただき感動しました。

全てビデオ上映があり、視覚的にも印象に残っています。

どの事例発表をされた社協も、地域のニーズを調査発掘し、自分の地域に合った形で取り組んであります。反省会での結論は、「良い研修を受けたなら、復命書を書いて終わるのではなく、いかに自分の社協、地域に生かしていけるかが課題だ。」ということでした。今、私の頭の中で、どう地域に出て行くか試行錯誤中です。今回知り合えた社協の方々にも相談しながら、一歩ずつ進んで行きたいと思います。

今回の研修兼つどいにご尽力いただき

ました関係者の方々、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。



「ワールドカップ日朝戦よりも熱く!」

筑後市社協 卜部 善行

私は社協歴十ヶ月、まさに新人ワーカーです。正直な話、地域の福祉課題を私自身が把握しきれていないし、地域密着の活動ができているのだろうか、という疑問もあります。

社協ワーカーとはどうあるべきかという根本的な悩みや葛藤を持っており、今回の研修は、具体的な業務の悩みや課題を抱えているよりも、これからの活動の自分自身の動機付けになれば、と思つての参加でした。ので、研修会で学んだ



具体的な内容については、触れませんが、以下、この2日間で感じたこと、思ったこと、学んだことを記述したいと思えます。

《それぞれの部屋で感じたこと、思ったこと》  
■事例発表をしてくださった先輩ワーカーさん（特に飯塚市の藤川さん）の情熱とパワーを感じました。自分にはパワーが足りないと思いました。

■「自分の地域をこうしたい！」という夢を持つとうれしかったです。

■これからの活動の刺激をたくさんもらい、明日からもっと頑張ろう、と感じました。  
■これまでの自分を見つめなおしてみようと感じました。

《それぞれの部屋で学んだこと(ワーカーとして)》  
■社協ワーカーは地域に出て、まずは顔を売らなければならぬことを改めて学びました。

筑後市の有名人になろうと思いました。  
■自分の地域を知ることが大切なことを学びました。

■地域の人たちと課題を共有することが大切なことだと学びました。

■ワーカーは地域の方々の立場で物事を考えなければならぬことを学びました。

私の場合、今回の研修が直接自分の業務につながり、参考になるかといえは、そういうわけではないのですが、たかさんの刺激をいただきました。また、他の

市町村社協のワーカーさんと夜中、明け方近くまでお酒を飲みながら語らうことができ、今後仕事で悩みがあったとき、気楽に相談できる先輩・仲間が増えたことがとても嬉しいです。

内容の濃い研修もさることながら、このような出会いも研修の良さだと思えます。ワーカー同士の横のつながりをつくり、多くの先輩ワーカーさんに相談しながら、アドバイスをいただきながら、地域福祉活動に取り組みたいと思います。



「地域担当社協ワーカーのつどい」

に参加して

熊本県南小国町社協 加賀 孝之

この度の研修へ参加させていただきま

した事に、まずは感謝とお礼を申し上げます。他県からの参加者は十数名程度でしたが、その中の一人となった私は、できるだけ多くの方々と面識を持ち、今後の自分の活動へ繋げようと、名刺を配りまわりました。たまたま我が町の黒川温泉と小田温泉を御存じの方が多く、その辺りの話題から、掴みはOKといった所で、割と皆様方と打ち解ける事ができました。この様な交流はなかなかできないので、本当にすばらしい事だと思えます。参加しないと損ですよ！

研修の内容については、4つのテーマに分け、それぞれの部屋を二日間ですべて受講できるという事で、私的には初めての研修スタイルでした。一回の研修で4度おいしいといった具合で、中身の濃いものだったと思えます。只、それぞれの部屋の方々は、二日間同じ事を4回話さなくてはならなかったので、大変だったと思えます。本当にご苦労さまでした。又、それぞれの部屋ともビデオが用いられていたのので、一方的な詰め込み式の研修ではなく工夫が凝らして有り、あつという間に時間が過ぎたという感がありました。

飯塚の藤川さんの熱い語り口に触発されて、今の自分はこのままで良いのか？と発奮させられたし、水俣の田代さんの流暢な語りには、本当にそつのない活動の様子を垣間見たり、『福祉移送サービ

スを考えてみる部屋』では、浮羽町と春日市の様子を紹介され、特に浮羽町は山間部を抱えているので、我が町と立地条件が似ていて参考になりましたし、春日市は我々から見ると、福岡市に隣接した都会にも拘わらず、意外と交通の便が悪く道幅も狭いという不便さがあると聞いて意外だったし...と、それぞれの地域のそれぞれの問題というのが有り、だからこそ我々社協の仕事も多岐にわたり、色々な事がなされているんだなあと感じました。浮羽町の國武さんの、自分自身の住んでいる集落のマップづくりが始まり、それが町内各地域への福祉マップづくりへと拡がっていったプロセスが、地域住民を巻き込んだすばらしい活動だと、私自身すごく感じ入りました。防災マップと合わせた様な物を、何としてでも作製してみたいと思いました。

この様に今回の研修に参加させていただき、福岡の地職連の皆様のパワーに触れてみて、ここ熊本の地でも頑張つて行きたいと思っております。皆様方の方々のご発展を祈念致します。それと県社協との関係修復も是非に！

「私のきつぎ」

行橋市社協 有永 健治

社会福祉協議会に入つて一〇年、地域

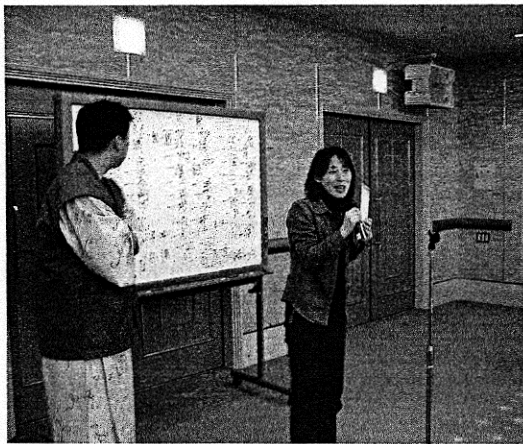
福祉担当として三年、今迄先輩がやってきたことを何の疑問も感じず、毎日仕事をしてきました。

昨年一昨年も、研修会には参加しましたが、今年は何かが違うと感じていました。自分自身の研修に対する意気込み、そして分科会々場と中身の濃さ、豊に座って膝を付き合わせ、狭い所での意見が飛び交う中、とまどいつつ、のめり込んでいきました。今迄の自分は傾聴者であったが、今回は黙っていられなかつた。地域担当ワーカーとは、こういうことなのかと目からウロコが……。今迄の二年余り自分は何をやっていたんだ、過ぎた時間をもったいないと強く感じた。

今回の研修全てが新しい息吹、反省と焦り、やりたい、やらなければとの気持ちとちがどどん膨らみました。もっと早く今回集まった人達の声や情熱を感じていればと痛感しました。

今回の研修の中で「地域福祉を推進するには、**気づき、きつかけ、づくり**が大切」だと教わった。初心にかえり、もう一度自分の現在置かれている立場を考え直し、そしてまず、ワーカーとしての第一歩を踏み出そうと思う。今回知り合った諸先輩達、これから分らない事をどんどん尋ねますので、いやがらず、面倒がらずに少しの時間を遅咲きの私にご提供下さい。次回、皆さんと会うときは、少

しでも成長しておきたいと思えます。最後に、こんな自分をこんな気持ちにさせて下さった講師の方々、又地職連役員の皆さん、ありがとうございました。今回学んだことを、行橋市の地域福祉推進に向けて、頑張るつもりです。



「地域担当社協ワーカーのつどい」

に参加して

長崎県五島市社協 清川 伸幸

私の住む五島市は長崎県五島列島最南端に位置し、平成十六年八月の行政合併に伴い社協も一市五町により合併がなされました。人口は約四万八千人、二万一千世帯となっています。高齢化率は28%を超え過疎化・少子高齢化の進行著しいまちとなっております。

このつどいに参加した経緯は市町村合併により、全市的であり、且つ、通年的に社協で取り組める事業を、県を飛び越え発展的な考えを共有できればと考え参加しました。島内には福祉活動専門員いわゆるワーカーが6名設置されており、その活動はマンネリ化し、団体事務専門員の業務であり、単発的な団体行事が地域福祉という考え方になりつつありました。

参加者の話や各部屋における事例を聞き、ワーカーとしての考え方は一致していることを実感しましたが、地域福祉とすることばの持つ意味は深く、その推進にあたっては地域差があり、その町々によって様々であることを改めて痛感しました。そこで様々なワーカーと連携し、情報を共有することは、ああそういうやり方もあるんだあと考えることのできる一つの材料になると考えました。こういったワーカー同士の情報共有体制はお互いが刺激しあい、新しいアイデアをより効果的にその地域において実施するために、一層活発にしていこうと、さらなる地域福祉推進に大きなバックアップになると思います。

五島市社協では何か社協カラーの出せようという事業を全文所統一して実施しようという事で、いきいきサロンを活性化しようとして福祉活動専門員部会で決定し

取り組もうと考えておりました。現在五島市におけるサロン活動は社協職員が行かねば始まらないサロンが大半であり、ボランティアの不足ではなく、立ち上げのプロセスに問題があったと感じました。社協とサロンの間にワンクッション置き、そこにはある程度の責任感が必要で、それが福祉委員であったり、ボランティアであったり、自治会であったりそれはサロンを形成する地域において考えることにより、よりよいサロン運営ができるのだなあと感じる事ができました。



このつどいに参加して最大のプラスは他社協ワーカーと交流ができたことであり、今後の活動について県をまたいで



様々な情報交換ができればと考えております。また、我々は地域福祉のコーディネート機能としての役割を担い、地域資源を繋ぎ合わせることを実践し、福祉問題の解決に住民全体で主体的に取り組むことができるように、側面から援助していく立役者として活動していくことが必要であると考えさせられました。



「地域担当社協ワーカーのつどい」

に参加して

黒木町社協 井口由美子

二月九〜十日、地域担当社協ワーカーのつどいに参加しました。今回は二日間にわたり4つのテーマを学ぶという、今までにないスタイルで、その内容が今現

在取り組んでいることや、これから取り組もうとしている課題ということもあり、どんな研修になるのか楽しみに参加しました。

まずは、二日間一緒に学ぶグループでの自己紹介。そこには、新人からベテランまで幅広い層が集まり、それぞれが「何か」を学び持ち帰ろうという意気込みを持って参加されていました。研修会場に入ると、そこは普段は客室として使われている畳の部屋で、講師と十数名の参加者、それにプロジェクターも加わり、ギューギュー詰めでしたが、それがかえって講師との距離を縮めていた様でした。また、講師が同じ社協マンで堅苦しさもなく、自分の経験を踏まえ、よい結果ばかりではなく、失敗した事や反省点、留意点などを交えながら、活動を進めていく過程を段階ごとに細かく説明され、さらにビデオを見ることで、具体的に実際の活動状況をつかむことができました。

今回、4つの部屋をまわり、共通して感じた事は、「地域を知り、地域に出ていかないと何も始まらない」ということでした。このことは、これまでの研修でも言われていた事ですが、どうやって地域に出て行くのか、具体的に何をすればいいのか分からず、地域に出るきっかけもつかめないまま今まで過ごしてきました。

した。

それが今回の研修では、先輩ワーカーの活動を聴覚・視覚の両方から取り入れ、「こうやって動いていくんだ」というイメージがつかめ、実践への第一歩を踏み出せたような気がします。また、他の社協の方々と情報交換しているうちに、今までの社協の流れに囚われ行き詰まっていたことも、他のやり方があることを知り、構えずにいた気持ちが一気に変わりました。今回のこの研修を活かし、地域での活動につなげていきたいと思えます。

「地域担当社協ワーカーのつどい」

に参加して

熊本県芦北町社協 田中 麻理

地職連主催の「地域担当社協ワーカーのつどい」に大変関心を持ち、他県の取り組みや現状を知る機会として、今回初めて参加しました。2日間にわたって、「映像を見ながら分かるまで話してみよう」をテーマに、少人数のグループに分かれて、4つの部屋をローテーションする研修を中心に行われました。各部屋に事例提供・説明者がおられ、実際に組んでいる活動のビデオを上映した後、話し合いながら内容を深めていくもので、大変わかりやすかったです。終始、座談

会のような楽しい雰囲気の中、他地区の社協ワーカーとの情報交換を通して交流を深めると共に、地域における社協の役割を、参加前よりも深く理解できたような気がします。



まず、地域福祉の中心であるべき社協は、地域住民の声を第一に、行政や福祉施設等のパイプ役として活動しなければならぬことを改めて実感しました。また、社協職員は何度も何度も地域に足を運ぶことで、地域の特徴や課題を把握し、潜在する真のニーズを見いだす事ができること、そうして初めて地域に根ざした活動を展開することができるということ、改めて知ったのです。そのためには、地域の行事に積極的に参加する等、日頃

からの住民とのつながりが大切であることを再確認しました。

そして、迷いや悩みがあるときは、全国の市区町村に社協があり、自分の職場以外でも、周りに大勢の仲間がいることを忘れず、日頃から各市区町村社協との連携を図ることも重要であることを知りました。また、同じ立場から悩みや課題を共に分かち合える点で、とても勇気づけられたと同時に、社協ワーカーとしての誇りを持つことができました。今回の出会いを大切に、常に夢と熱意を持って、今後は更に積極的に地域に関わっていきたいと思います。

とにかく盛りだくさんの内容で、まだまだ書き足りませんが、最後に、貴重な機会を提供してくださった地職連会長をはじめ、講師の方々、そして仲間のみなさん、本当にありがとうございました。福岡が更に好きになりました。今後もうぞよろしく願います。



◆◆研修後記◆◆

今回のつどいを終えて痛感したのは、『集う』ということやはり大切だという事でした。皆さんの感想文から見てもしみじみ感じられることですが、私たちは住民組織化で住民交流は促すものの、自分たちの交流機会が減少し、自分の担当するマチでしか、物事を見たり感じたりする事ができなくなり、この取り組みでいいのかも分らない様な、『井の中の蛙』になっていることがあるようです。地職連存続の是非を問うた時にも、「他の社協職員と情報交換できるので、地職連活動を存続して欲しい」との声が多く挙がっていました。とにかく複数名で集まって、社協のこと、地域のこと、自分たちの想いをぶつけ合うことと機会が重要なようです。

そういった意味では、今回のつどいは、参加者の方々の良縁を少なからず演出できたような気がします。今後皆さんこの「集いたい」というニーズに応じて、このような機会を作っていきたいと思えますので、今回参加出来なかった皆さんも今後は是非ご参加下さい。

じっくり、みっちり、ねちっこく、みんなまで語り明かしましょう！そして、後々もお互いに気軽に相談出来るような関係を作りましょう！

平成十六年度を振り返る

通常年度の半分の期間で、三つの研修と二回の広報を発行したわけですが、各社協の会員の皆さんには、地職連の取り組みがどのように映ったでしょうか？

「物足りなかつた」「つまらなかつた」「研修があつたことすら分らなかつた」「自分の仕事の参考になつた」「他の仲間との輪が広がつた」など、賛否両論様々あつたことでしょう。

地職連の存続、解散の議論をしたものほんの最近だつたのですが、何とか形は残せたのではないかと思います。各研修を振り返ると、ホームレス支援活動はごくわずかな参加者での実施となりましたが、政令市（北九州市・福岡市）からも参加して頂き、今後の新規会員加入への足がかりになつたと思われまふ。

地域福祉権利擁護事業・成年後見制度研修では、各ブロックごとに会場を設定し、それぞれに事業や制度の学習を進め、自分の地域で要支援の方への支援のあり方や方法を理解して頂けたようです。

また、地域担当社協ワーカーのつどいでは、本誌の中でも多くの感想を挙げていますが、「集い情報交換する」ということの必要性を強く再認識させられたものとなりました。

ただ、これらの事業や会報を発行する

にあたって、どうしても大きな問題になるのは、「事務局体制」でした。

それぞれ違う職場にいるブロック役員が、必要に応じて集まり事務作業をするということは結論から言えば「無理」です。かといって会長を受けた職員がいる社協が、事務局業務全般を引き受けるということになれば、おそらく今後、誰も会長を引き受けることはありえませぬ。

では今後「地職連をなくす方向で」ということにも絶対にしたくはないと思いますが、福岡県社協が地職連の事務局業務を再び持つことが、絶対にならないという状況下で、次年度は事業への参加だけでなく、事務局の事なども考えて下さい。

【発行者】

福岡県地域福祉活動職員連絡会

【事務局】

〒839-1306

福岡県うきは市吉井町新治372

うきは市社会福祉協議会内

TEL 0943(76)3977 FAX 0943(76)4329

E-mail:info@ukiha-shakyo.or.jp